

取組実績の概要（2 ページ以内）

平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム：テーマ I（アクティブ・ラーニング）」に選定された本学の取組みは、本学独自の英語教育施設（SILC: Sojo International Learning Center）に併設した自律学修センター（SALC: Self Access Learning Center）の実績（学生の主体的学修により年間利用者数が 4 年間で 12 倍に拡大）をもとに、SALC のノウハウを全学に普及することで学生の自律学修マインドを醸成し、専門科目のアクティブラーニング（AL）化を推進することである。また、そのために設置した全学 SALC/学科 SALC、及び図書館の利用時間を可視化して単位の実質化を図る。これらの試みは、今だ未完成であるが、後述するように、当初の AP 数値目標は、すべて達成することができた。本事業は、令和元年度より、すでに本学独自の崇城大学教育刷新プログラム（SEIP-II）に引き継がれ、予算化を含め継続されていく。

本事業では、全学 SALC/学科 SALC を担う教員（ファカルティーデベロッパー（FDer））と学生ファシリテーター（学生 FC）の研修（FDer 錬成会）と組織化（SALC ネットの会）を通じて、本事業の学内普及を試みた。また、そこで用いられる「学習アドバイジングスキル」が FDer 錬成会で教員と学生の間で共有された。当初、この「学習アドバイジングスキル」の研修会（2 泊 3 日）を行っている神田外大に本学専任教員を派遣し研修を受講させてきたが、語学教育のための「学習アドバイジングスキル」がそのままでは理系の本学の専門教育には適していない可能性があったため、FDer 錬成会での学生の視点と教員の視点を共有する中から、最終年度ではあるが、「学習アドバイジングスキルガイドブック（1st ed.）」としてまとめることができた。このガイドブックは、本学での総論と数学 SALC での活用例をまとめたものであるが、今後物理 SALC や生命 SALC などでの活用例を加筆し、改訂していく予定である。また、学内で「学習アドバイジングスキル」の研修を行えるトレーナー（専任教員）も 1 名養成することができた。今後、この教育ツールを学内へのさらなる普及を図ると共に、近隣の連携協定を締結した大学への「自律学修マインドの醸成」の普及に活用できるものと考えている。また、この FDer 錬成会によって、各学科のアクティブ・ラーニングを行う専任教員も、平成 26 年度の 89 人（35.6%）から、令和元年度には 182 人（72.8%）と増大し、アクティブ・ラーニング形式の講義は、平成 26 年度の全科目の 12.2% から、令和元年度には 26% まで増大した。その結果、アクティブ・ラーニング形式の講義を受講した学生数は、平成 26 年度が全学生（4 年生・薬 6 年生は除く）の 58.7% であったのが、令和元年度は 100% まで増大した。これによって、すべての学生が、各学年で必ず主体的に学ぶ講義を受講することになった。

さらに、本学の全教科には、授業外学修時間を増やすために、図書館の指定図書等を活用した課題を学生に課し、提出物を評価の一部とするようシラバスに記載を求めている。全学 SALC 学科 SALC では、FDer と学生 FC が曜日と時間を決めて駐在し、「学習アドバイジングスキル」を活用して、この課題の主体的学びを支援し、図書館の活用につなげている。また、図書館に新規の入退館システムを導入し、学生の図書館の利用数と滞在時間の把握を行った。これらの活動の成果として、右図に示したように、全学 SALC 学科 SALC の利用者数・利用時間と図書館での一人当たりの平均滞在時間が 6 年間で増大した。

全学 SALC 学科 SALC の利用者数・利用時間は、平成 26 年度 76 人・111 時間であったのが、令和元年度は 2840 人・3581 時間まで、約 30 倍増大した。一方、図書館利用者の平均滞在時間が、平成 26 年度の 11.2 分/人から 32.2 分/人と 3 倍に向上した。

また、学生一人当たりのアク

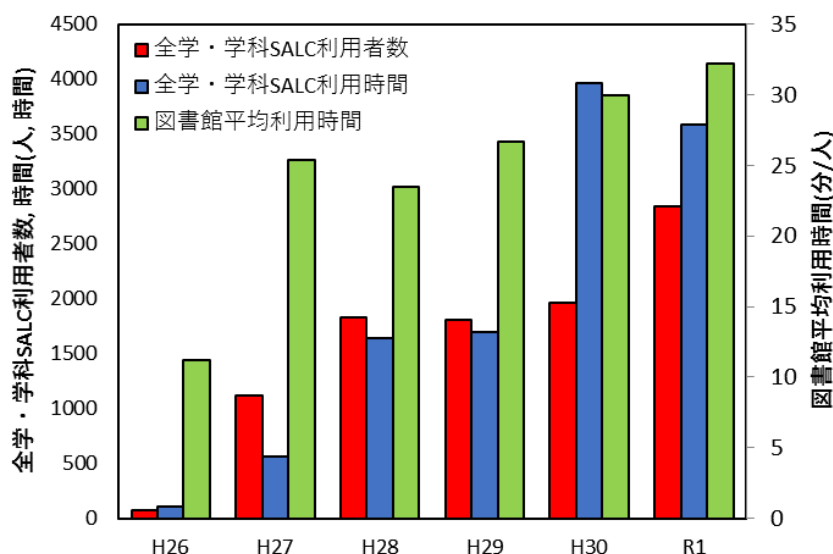


図 全学 SALC 学科 SALC の利用状況と図書館の平均利用時間

ティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間のアンケート調査では、平成 26 年度が 2.3 時間/週であったものが、令和元年度は 6.5 時間/週（情報学科 1・2 年生）まで約 3 倍増加し、図書館の平均滞在時間と相関しているように思われる。これらの授業外学修時間は、まだ十分とは言えないが、本事業の取組が、利用時間を増大させる効果を発揮していると思われ、今後、この時間の増大を目標にして、単位の実質化につなげる予定である。また、図書館が独自に毎年行っている学生の図書館利用の目的調査では、講義に関する資料の利用（自主学修）の割合が、平成 26 年度には 21% だったのに対し、令和元年度は 30% と増加している。

各学科 SALC での自律学修を促すアクティビティーの開発は、数学・物理・薬学基礎（応用生命科学科）などで、授業科目の成績に反映される SALC でのアクティビティーが作成されたが、それ以上に学科専門科目の自学自習の場として全学 SALC 学科 SALC が活用され、SALC の活用が向上したことは成果と考えられる。また、全学 SALC が教職サークル（教職を目指す学生の自律学修サークル）という課外活動の場として活用され、3 年連続の教員採用試験現役合格につながったのも、成果の一つと考えられる。

【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合	12.2%	25.0%	26.0%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合	60%	70%	73%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	100%	100%
学生一人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	1.5 科目	2.2 科目	4.8 科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	35.6%	60.0%	72.8%
学生一人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	2.3 時間/週	4.0 時間/週	6.5 時間/週

一方、本事業の取組で目指した人材育成目標は、「主体的に行動できる社会人の育成」である。客観的エビデンスをもとにこれを評価するために、平成 30 年度からの社会人基礎力テスト（PROG テスト、MATCH plus テスト）を開始した。また、学生自身の主観的エビデンスを得るために、卒業時アンケートと在学時アンケートを実施した。さらに、これらの評価エビデンスと、現在すべての科目で実施している「科目の学修到達度レポート」というポートフォリオを活用することで、独自の評価指標を構築していく。これまでのエビデンスでは、学生のコンピテンシーを評価できる PROG テストを全学科の 4 年生を対象に実施し、令和元年度は、「学生の主体性」に焦点を当てた社会人基礎力テスト（MATCH plus）を全学科の 1 年生（4 月）と 3 年生（10 月）を対象に実施した。この外部テストの結果、MATCH plus では、社会人基礎力 12 項目の内、全国平均（数万人規模の調査）に比べて、本学入学時には、平均以上の項目が 3 項目であったものが、3 年次後期には 5 項目（働きかけ力・実行力・課題発見力・状況把握力・規律性）に向上したことが示された。本学 AP 事業で目指したものは、自律学修マインドの醸成であり、社会人基礎力の 3 つの力の内、「前に踏み出す力」の中の 2 項目（働きかけ力・実行力）が向上したことは取組の評価につながると考える。また、平成 30 年度の卒業時アンケートでは、83% の学生が「主体的に学ぶ力」が向上したと回答している。

令和元年度は、本事業の最終年度であるため、最後のまとめとして、11 月には AP 事業北九州合同セミナーで本学の取組を紹介した。また、11 月末には立正大学において行われた令和元年度大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ I アクティブ・ラーニングシンポジウムにおいて登壇し、本学の AP 事業と教育改革の取組について紹介した。